

7. 中間小活—近世人の常識と政治文化

2025. 5.30. 大橋 幸泰

1. 近世民衆史研究の先達

(1) 安丸良夫氏の通俗道徳論／「日本の近代化と民衆思想(上)(下)」(『日本史研究』78・79、1965年)

近世から近代への転換／民衆の膨大な自己抑制が原動力

* 勤勉・孝行・分相応などの通俗道徳の実践／治者のイデオロギーである儒教理念を淵源

→しかし、民衆によって内面化されていき、既存秩序への批判精神を醸成

→どんなに真面目に働いても、既存秩序のもとでは幸福を望めないとの確信

→世直し一揆や民衆宗教というラディカルな形で、既存秩序を批判

通俗道徳の実践／戦後歴史学では封建遺制として見なされた

→民衆が自らを解放する跳躍板として捉え返したことを、安丸氏が見いだしたところに画期性

→日本の近代化／民衆の規範意識によって支えられていた／その上に治者が存立

(2) 深谷克己氏の百姓成立論／「百姓一揆の思想」(『思想』584、1973年)

百姓一揆の思想／治者の支配を正当なものとする御百姓意識

* 民衆は自らを幕藩体制の構成員である御百姓と捉え、領主にはその公的な御百姓を成り立たせる義務があると考える／仁政・安民は領主の責務

→その義務を怠ったと百姓が見なしたとき、百姓一揆が発生／領主は仁君・明君であることをアピール

百姓一揆／人民闘争史研究(1960代後～1970代前)では、変革の運動として見なされた

→幕藩体制を支える民衆意識の表出であることを、深谷氏が見いだしたところに画期性

→百姓一揆史料の検討から、「百姓成立」という治者・被治者、共通の目標・合意を抽出

2. 民衆史研究の射程

「民衆」概念／生活を基盤に被治者全般を統括するターム／「民衆」とは「生活の専門家」(安丸良夫)

→民衆史は、「民衆」の対極にある国家史・政治史まで射程に入る／総合史を志向

【参考文献】

『安丸良夫集』全6巻(岩波書店、2013年)

『深谷克己近世史論集』全6巻(校倉書房、2009～2010年)

大橋幸泰「「民衆」を考える—早稲田大学関係者による日本史研究を中心に考える民衆史研究の軌跡と展望—」(『早稲田大学 教育・総合科学学術院 学術研究(人文科学・社会科学編)』68、2020年)

大橋幸泰「近世日本の民衆史研究—民衆運動・政治思想・身分認識をめぐる議論から属性論の射程を展望する—」(『民衆史研究』102、2022年)

* 両論文とも、大橋幸泰『近世日本邪正論—江戸時代の秩序維持とキリシタン・隠れ／隠し念仏』(勉誠社、2024年)に所収

【付記】

・明日までに、Waseda Moodleにて講義記録の提出を求める。／今回は本時間での議論を含めて、ここまでの講義の感想を書いてください。